

平成29年度第2回東温市地域公共交通会議（東温市地域公共交通活性化協議会）

次 第

日時：平成30年1月15日（月）

午前10時～

場所：東温市役所4階 405会議室

1. 開会

2. あいさつ

3. 協議・報告事項

（1）地域公共交通確保維持改善事業に関する事業評価について・・・【資料1】

（2）市内バス路線の利用状況について・・・・・・・・・・・・・・・・・・【資料2】

（3）予約制乗合タクシーの利用状況について・・・・・・・・・・・・・・・・・・【資料3】

4. 閉会

<資料>

【資料1】地域公共交通確保維持改善事業に関する事業評価（案）

【資料2】市内バス路線の利用状況

【資料3】予約制乗合タクシーの利用状況

平成29年度第2回

東温市地域公共交通活性化協議会（東温市地域公共交通会議）出席者名簿

	団体	役職	委員	備考
1	東温市	副市長	大石 秀輝	
2	伊予鉄道株式会社	運輸事業本部長	中尾 均	(代理) 畦地 大輔
3	東温市タクシー連絡協議会	会長	和田 宏一	(欠席)
4	愛媛県バス協会	専務理事	稲荷 和重	
5	愛媛県ハイヤー・タクシー協会	事務局長	田所 秀志	
6	国土交通省松山河川国道事務所	計画課長	福田 尊元	(代理) 片岡 章
7	愛媛県中予地方局	建設企画課長	中川 逸朗	
8	東温市産業建設部	部長	丹生谷 則篤	
9	東温市区長会	会長	三棟 義博	
10	東温市老人クラブ連合会	会長	田中 康雄	
11	東温市婦人会	会長	高須賀 恵美子	(欠席)
12	東温市PTA連合会	顧問	門地 剛史	(欠席)
13	東温市社会福祉協議会	会長	藤原 弘	
14	市民の代表（公募）		藤本 貞夫	
15	市民の代表（公募）		横手 裕子	
16	松山南警察署	交通課長	岡村 陽介	(代理) 壽川 晃
17	伊予鉄道労働組合	副執行委員長	寺田 淳泰	(欠席)
18	四国運輸局愛媛運輸支局	首席運輸企画専門官 (総務・企画担当)	山下 文明	
19	四国運輸局愛媛運輸支局	首席運輸企画専門官 (輸送・監査担当)	谷本 昌啓	
20	愛媛県	中予地方局 地域政策課長	久保田 晶	

平成29年度第2回東温市地域公共交通活性化協議会 議事録

日 時： 平成30年1月15日(月) 10:00~11:00

会 場： 東温市役所 405会議室

1. 開会

進 行： これより平成29年度第2回東温市地域公共交通活性化協議会を開会する。

2. あいさつ

会 長： <挨拶>

3. 協議・報告事項

(1) 地域公共交通確保維持改善事業に関する事業評価について

事務局： <説明(資料1)>

会 長： 何か質問等はあるか？

藤 本： <資料1-1>の⑤目標・効果達成状況で、山間バス4路線での1便あたりの利用者数3人以上及び、横河原駅での路線バスと鉄道の接続時間10分以内という目標を達成できているとあるが、交通結節点との接続が重要になってくると思うが、3人以上と10分以内という目標だけでいいのか。また、路線バスからどのくらいの人数が電車に乗り換えているのかという指標もいると思うが、その点はいかがか。

事務局： 今のところ、乗り継ぎでの利用者数の調査というのは行っていないが、そのような調査はできるのか、伊予鉄道さんにお伺いしたい。

畦 地： 乗降調査というのは、バスの運転士が集計しているのだから、乗車人数というのは運転士で把握できるのだが、バスを降りた後電車に乗り継いだのかどうか調べるのは、現状では難しいのではないかと感じる。

会 長： ⑤目標・効果達成状況でA評価となっているが、乗り継ぎの状況把握というのは、評価の指標にはなっていないのか？

事務局： ⑤目標・効果達成状況については、協議会で定めた目標について達成できているかどうかということなので、乗り継ぎの状況がどうなっているかというのは必須項目というわけではないが、指標としては取り入れてもよいのではないかと感じる。

藤 本： <資料1-2>でも、隣接している松山市とも密接な関係にあると書かれてあるので、公共交通を利用して、山間部だけで移動するのではなく、東温市から松山市に移動することも大事なことであると思う。接続するというのが大きな目的であり、目的・必要性として記載してある以上は、その答えというのも今後は必要なのではないか。

事務局： 今後、期間を設けて市の職員もバス停に赴き、実際に何人がバスから電車に乗り継いでいるのかという調査をすることについても検討していきたい。

藤 本： 運輸局の方にもお伺いしたい。事業評価の方法や内容については、今回記載してあるような内容で十分であると言えるのか。

谷 本： 事業評価は、一次評価として協議会で自己評価をし、その結果を高松の本局に送り、学識者なども交えた場で二次評価を行うという二段階で評価するという形になっている。評価の内容がどこまで必要であるかというのは、難しいところではあるが、第一義的に言うと、

望ましいのは数値的に乗車人数等の目標が達成できているのかどうかである。それ以外にも、地域の事情等もあるかと思うので、数値以外の面でも地域での公共交通の果たす役割が十分なのかどうかというのも協議会で意見をいただいて、付け加えることができる部分があれば付け加えて一次評価としていただきたい。本局の方でもこうだから駄目だという判断はなかなかしづらいと思うので、協議会で意見を出していただいて、もう少しこのような視点もいるのではないかというところがあれば、それを次に反映していただくというのが本来の姿だと思う。

会 長： 当初掲げていた、乗車人数の目標に関しては達成できているということだが、実態を把握するうえでも、先ほど藤本委員からのご意見にあった内容も調査して、協議会でも報告したりすることは、今後の公共交通の問題点を考えていくことにも繋がると思うので、検討していただきたい。他に何か質問等はあるか？なければ、協議会での自己評価として、案のとおり四国運輸局に報告してよいか？

各委員： <全員賛成>

会 長： ご承認いただいたので、事務局は手続きを進めていただきたい。

(2) 市内バス路線の利用状況について

事務局： <説明（資料2）>

会 長： 何か質問等はあるか？

藤 本： 2、3点お伺いしたい。まず、平成27年から、5月と10月に乗降調査を行っているが、今回はなぜ11月なのか。次に、滑川線の利用者数が今回の調査で急増しているのはなぜなのか。最後に、それぞれの系統の終着点、発着点で利用者数に違いがあるのはなぜなのか。

事務局： まず1点目の調査時期であるが、特に調査時期については絶対この月にしなければならないというものではないが、できるだけ同じ月の方が比較しやすいという理由で、おおむね5月と10月に調査している。今回はずれ込んで11月に調査ということになった。

藤 本： 伊予鉄道さんの方ではなにか、理由があったのか。

畦 地： 調査の準備等の調整に時間がかかったりしたので、結果的に11月にずれ込んだ。

事務局： 今年度は国体等の行事が10月にあったので、そのような事情も関係している。

藤 本： 運転士さんが乗降者数をカウントするのであれば、国体があるうとなかろうと関係ないのではないか。

丹生谷： 国体といった大きな行事があると、市民の方に普段の利用とは違った特別な移動が生じる可能性がある一方で、日常的な利用の期間をとって調査した方が、より現実的な利用者数の統計になると思う。

藤 本： 公共交通の活性化を図るというのであれば、山間部の方は国体を見るために路線バスを利用するという可能性もあるというのに、利用者数が増える要因があるから、その期間を調査対象から外すというのは意図的な調査になってしまう。定期的に調査するのであれば、定期的に調査すべきであると思う。

田 中： そうおっしゃるのであれば、逆に特別な行事がある時こそ、調査対象から外した方がいいと思う。特別な行事があるから利用者数が増えたといっても、では、例年の同じ時期と比べたらどうなのかということになると、特別な行事のある期間は調査対象から外した方が

いいと言われることもある。

会 長：今回は11月の調査になったということであるが、平常時の利用状況の調査という点では、国体といった特別な行事があった10月ではなく、11月に調査したことは問題なかったのではないかと思う。次に2点目の滑川線の利用者数が急増していることについて説明をお願いしたい。

事務局：今回委員としてご出席いただいている、横手委員が代表を務めている「みんなの公共交通を考える会」主催の路線バスツアーが11月16日に開催され、そのツアーで滑川線の路線バスを活用していただいたことから、利用者数が急増している。先ほど申し上げた話と矛盾しているが、こちらの状況把握不足で、結果的に特別な利用であるツアーと重なって調査してしまった。

会 長：最後に3点目の、それぞれの系統の終着点、発着点で利用者数に違いがあるのはなぜか。

事務局：山間部を路線バスで出られた方が、必ずしも帰りも路線バスで移動するわけではなく、送迎等で移動している可能性もあるからだと思う。

横 手：先ほど、特別な事情があって利用者数が増加したという話があったが、私たちの会の目的は、路線バスの利用者数を増やすということや、地域おこしや観光に繋げることなどがあるので、乗降調査についても観光目的で利用されている方なども含めてカウントしても問題ないのではないかと思う。

谷 本：調査時期の関係で、横手委員さんが実施された路線バスツアーと重なってしまったため、利用者数が増えているという話があったが、全国どこの自治体でもそうだが、人口減少などに伴い、地域の人々の利用だけでは、利用者数を増やすことが難しくなっている。観光などで東温市を訪れる人を路線バスで運ぶといった交流人口という部分で利用者数を増やすということも考えていくべきだと思う。通常の利用者と合わせて、他の地域から訪れた人も、地域の路線バスを利用することで、利用率が向上し、公共交通を維持することに繋がるといことも、より広くとらえていかなければならない視点なのではないかと思う。今回は、利用者数増加の一つの要因として路線バスツアーの実施があがってきたというのは、非常に意味のあることではないかと思う。

会 長：他に何か質問や意見はあるか？

各委員：＜質問・意見なし＞

会 長：ないようなので、以上で市内バス路線の利用状況について終わる。

(3) 予約制乗合タクシーの利用状況について

事務局：＜説明（資料3）＞

会 長：何か質問等はあるか？

横 手：チラシ等を区長さんを通じて配布しているという話があったが、チラシを渡す際に、区長さんにはどのような話をするのか。

事務局：利用率等の話をして、目標の利用者数を達成できていなければ、達成できるように積極的に乗合に努めていただき、区長さん等も積極的に利用していただくようお伝えしている。

横 手：地域の方からのご意見等はなにかないか。

事務局：区長さんを通しては、特にご意見等はいただいている。

会 長：利用されている方、されていない方の意見や実態等も調査する必要があるのではないかと思

う。他に質問や意見等はないか？

各委員： <質問・意見なし>

会 長： ないようなので、以上で予約制乗合タクシーの利用状況について終わる。

(4) その他

会 長： 本日の協議・報告事項は終了したが、その他で公共交通に関するご意見や、お気づきの点等はないか？

藤 本： 協議会は、公共交通の利用促進を目的としているということでよいのか。

事務局： 公共交通の維持・活性化に向けて協議をさせていただく場として開催している。

藤 本： では、みんなの公共交通を考える会等の市民団体が行っているような、イベントが増えていくことによって、バスの利用者数が増えていくので、そのような活動を増やしていくというのも必要であるという認識でよいのか。

会 長： 各地域で実施されているイベントを通して、公共交通を利用させていただくのがベストである。特に滑川地区は地域おこし協力隊が活動しており、観光地もあるので、イベントを増やして公共交通の利用者数も増えていくというのが理想ではある。

藤 本： 滑川だけにかかわらず、井内や山之内などの路線ごとにイベント等を市民団体に企画していただいて、それに対し市が補助するということは考えられるのか。

会 長： 先ほどもお話ししたように、地方創生事業の一環として、滑川、井内、松瀬川、河之内、そして山之内の一部の計5地区に、地域の活性化を目的に地域おこし協力隊が入り、地域の方とタイアップしてイベント等を行っている。そのようなイベントを開催すると、公共交通利用者も増えていくと思うが、最近はマイカーの普及により、車で現地まで来る人も多いため数字としてはなかなか表れないという現状もある。各地域の山間部の活性化に向けた取組は行っているが、まだまだ定着しておらず、これからもっと推進をしていくといった状況である。

藤 本： その中で協議会というのはどのような役割を果たすのか。

事務局： 本市の取組状況の報告や乗降調査等による公共交通利用者数の報告等を行い、市外の委員の方も多くいらっしゃる中で、そのような方にも取組状況や現状等をお伝えできる場所になればと思う。それが結果的に公共交通の維持・活性化に向かっていくことのできる場になればと思う。

会 長： 地元の協議会が行われる際は、バスの時刻等を広報して利用いただくという形をとっているが、皆さんマイカーを利用されているので、今後も公共交通を利用していただけよう周知に努めたい。

三 棟： 伊予鉄道さんにお伺いしたい。JRではアンパンマン列車などの、ラッピングされた車両を写真に収める人が多く、効果が高く感じる。東温市内を走っている伊予鉄道さんのバスも、低床バスで乗り降りがしやすいようにしていただいているが、少し目線を変えると子どもたちが喜びそうなものだが、やはり費用等の問題もあるのか。

畦 地： 費用等の問題も考えられる。清水社長に代わってから、「乗ってみたいくなる公共交通」ということで、車両の色は愛媛らしいオレンジ色を推したりしている。

会 長： 松山市内を走っている路面電車や路線バスもキャラクターやスポンサーのラッピングがされた車両が走っているが、郊外の車両もということになるとなかなか難しいのではないのか

と思うが、ラッピングも公共交通の利用促進策の一つになるのではないかと思う。

横 手： 現在、東温市内の各地区で地域おこし協力隊が入り、市内でたくさんのイベントが開催されている。路線バスの再編前は土曜日でも路線バスが走っていたが、現在は走っていない。路線再編の時に、土曜日でも走るようにしていれば、今はどうなっていたのだろうかと考えられることも多い。やはり、なにかをやめたり、新しく作ったりするときは、長い目で考えなければならないと感じた。土曜日のイベントになると、車で行かざるをえないのももう少し考えていかなければならないのではないかと感じている。あと、山之内を走っている森松・横河原線が、横河原駅までは多少人が乗っているが、横河原駅から山之内に向かうときはあまり乗っていないように感じる。そのあたりはどのようなになっているか。森松・横河原線は土日も運行しており、平日もほかの山間バス路線よりは便数が多くなっている。山之内の終点の先には、漣痕化石といった魅力的なものも多く、行ってみたいという方も多いので、目的地までの行き方をお伝えできれば、便数も多いので路線バスに乗って行かれる方も多いのではないかと思う。

会 長： 現在、森松・横河原線は1日何便運行しているのか。

事務局： 平日が1日往復6便、土日祝日が1日往復2便となっている。

会 長： 次回までに事務局は、森松・横河原線の乗降調査結果も協議会で報告をお願いしたい。また、横手委員さんがおっしゃられたように、イベントは土日祝日に開催されることも多いので、路線バスも運行していればいいのだが、年間を通せば事業者としてもなかなか難しいのではないかと思う。

谷 本： 11月16日に開催された、みんなの公共交通を考える会の路線バスツアーの様子を新聞の記事で拝見したが、当日の状況はどのような様子だったのか。

横 手： 実施時期が秋で、バス路線のあたりは紅葉が美しかったので、滑川溪谷には行かず、滑川清流の森を拠点としてその周辺の神社仏閣、見どころを調べて、皆さんにご案内した。帰りは落出のバス停までみんなで歩き、人によっては滑川行の路線バスに再度乗車し、バスの中から紅葉を見た人もいる。参加状況としては、定員の関係上毎回10人くらいはお断りをしている。ツアーの際は伊予鉄道さんをお願いして、大きめの路線バスを走らせていただいております。大変助かっている。次年度の計画として、滑川溪谷はやはり人気が高いので、夏に2回イベントをしようと考えている。白猪の滝や山之内、源田桜を見に行くツアーも企画している。参加者は半分がリピーターで半分が新規の方で、松山市や西条市からも参加がある。ツアーを実施するたび、東温市は非常に人気が高いところだということを実感しているので、これからも良いところを発信していきたいと思っている。

会 長： 他に何か質問や意見はあるか？

各委員： <質問・意見なし>

4. 閉会

進 行： 以上で平成29年度第2回東温市地域公共交通活性化協議会を閉会する。